

京都府自然観察指導員等研修

2019年1月8日 深泥池・歴彩館 (講師：竹門康弘氏)

10時に深泥池に集合し、野外学習の後、歴彩館で座学を受けました。野外学習ではまずタヌキモとオオバナノイトタヌキモを観察しました。前者は在来種で、京都ではここだけに生息しており、後者は北米原産の外来種であるらしい。食虫植物で、黒い粒々が沢山ついており、これで、獲物を捕獲するという。他にもトウナンアジアウズムシやイトトンボのヤゴも観察することができました。トウナンアジアウズムシは日本でここにしか定着していない外来種であり、トンボは68種が確認されているそうです。



市街地にありながら、多種多様な生き物たちを受け入れる「懐の深さ」を感じさせる不思議な場所でした。その懐の深さには、大きく3つの理由がありました。

1つ目は14万年前から存続してきたことです。14万年間、水が干上がることなく、飛来してくる生物を受け入れ続けたため、多様性が徐々に蓄積して行きました。

2つ目は貧栄養、酸性条件であることです。おかげで貧栄養条件に適応した希少生物が生息することが出来ています。

3つ目は浮島など多様な環境があることです。マコモやヨシからなる低層湿原とミズゴケからなる高層湿原、開水域、周囲の林など多様な環境を持つことで多様な生物を受け入れることが出来ています。

座学では深泥池についてさらに詳しくお話していただきました。今後の課題は天然記念物となり、行われなくなった泥拔きの再開や蓄積している有機物の系外への搬出などだそうです。自然を守るということは、人の手を入れずに放置することではなく、自然をよく理解した上で、手を入れることなんだと再認識させられました。

深泥池は平安時代以降1200年間人為的影響を受け続けてきました。自然と人間の共生の一つの成功例であり、上手く自然と付き合っていくためのヒントを学ぶことが出来る場所だと感じました。(辻)



深泥池での野外学習のようす



タヌキモ sp.



歴彩館での座学のようす